

たはら 探訪

TAHARA History Inquiry Club

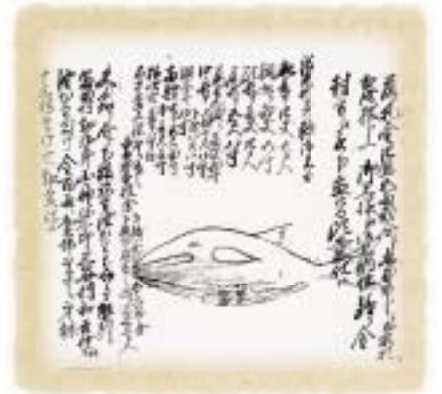
歴史 探訪

クラブ 其の55

海での拾いもの

波瀬区には、慶応2年(1866)に波瀬村の海岸に打ち上げられた全長14mの大鯨、実際はナガスクジラ)のてん末を記した、『大鯨流寄記録』が残されています。村は、このクジラを入札にかけて多額のお金を得ました。クジラの油は、当時のお金にして百両で売れたようです。村の人にとってクジラは、まさしく富をもたらした、海で拾った大物でした。

海運が盛んだった中世から江戸時代には、遠州灘で難破した船が表浜に流れ着いたようです。江戸時代の



波瀬に流れ着いたクジラの記録(部分)



表浜で拾った美しい貝
(マクラガイ・タカラガイ)

記録では、難破した船の取り扱いは、例え、その報告や救助の義務のほか、拾った荷物の一部が拾得者のものになるなど、取り決めがあったようです。難破船やその荷物はありがたくもあり、迷惑でもある拾いものでした。

表浜では、ベンケイガイ(貝輪の素材)のほか、縄文時代にハンマーや土掘り具、刃器の材料などに使われた丸石も拾える場所があります。貝塚から出土するダンベイキサゴ

(ながらみ)も、食用として、ついでにここで採取したものでしょう。また、流木も波で削られることで加工の手間が省け、道具として使えるようなものも流れ着いていたに違いありません。海岸は、人々にとってまさに宝の山だったことでしょう。

このような漂着物の中には、植物の種子や、異国を感じさせるものもあったことでしょう。島崎藤村の『椰子の実』は、わが国の民俗学の父である柳田国男が、明治31年の夏、恋路ヶ浜で椰子の実を拾い、そのことを藤村に話したことから生まれたものです。このエピソードのほか、柳田が日本人のルーツを南に求めた『海上の道』も、これら海での拾いもののロマンを象徴するものです。

さて、このようにさまざまな恵みやロマンをもたらした渥美半島の海ですが、近年は変化が訪れています。それは海を歩けば一目瞭然。いわゆるゴミです。自然に帰ることのないプラスチック、ペットボトル、釣り糸、運動靴、空缶、ビニール袋。縄文時代にはこんなゴミはありませんでした。というより、ゴミを出さない生活をしていました。もし、当時の人がこのような光景を見たらどう思うのでしょうか。豊富な物質に



表浜に流れ着いたごみ
(ペットボトル・サンダルなど)

驚くのか、それともなぜこんなものが落ちてくるのかと疑問に思うのか。とここで、現在拾うことのできるベンケイガイは、死んでから長い期間、海で漂ったものです。これは、海底の地形の影響で海岸に打ち上げられないためなのか、近年ベンケイガイの生息数が減ったためなのかはわかりません。また、ベンケイガイは水質に影響を受けやすいといえます。かつて落ちていた大きなベンケイガイに比べ、最近小型のものが多くなってきたのは、幼貝のうちに死んでしまう、すなわち、知らず知らずのうち水質悪化が進んでいるためなのかもしれません。

かつての、宝物いっぱい海岸にしたいものです。(増山)
文化財課 ☎ 23局 3531

このコーナーでは、「身近な史実に目を向け、そこから学ぶ」という視点で、田原市の歴史・文化・風俗などを紹介しています。